

【予報の概要】

農作物名	病害虫名	発 生 程 度	
		現 況	予 想
早期水稲	いもち病（穂いもち） 紋枯病 穂吸汁性カメムシ類	並 並	並 並
普通期水稲	いもち病（葉いもち） 紋枯病 縞葉枯病 セジロウンカ トビイロウンカ（防除情報第 8 号） コブノメイガ（防除情報第 8 号）	並 やや少 やや少 並 やや多 やや多	並 やや少 並 並 やや多 やや多
大豆	ハスモンヨトウ		やや多
いちご （育苗床）	うどんこ病 炭疽病（ <i>G.cingulata</i> ） 輪斑病 ハダニ類	並 並 多 やや多	並 並 多 やや多
アスパラガス	アザミウマ類	やや少	やや少
かんきつ	かいよう病 黒点病 ミカンハダニ チャノキイロアザミウマ	少 やや多 やや多 やや少	少 やや多 やや多 やや少
びわ	がんしゅ病 ナシヒメシンクイ	並 並	並 やや少
なし	ナシヒメシンクイ	並	やや少
ぶどう	べと病（注意報第 5 号継続）	多	多
果樹共通	果樹カメムシ類	並	並
茶	炭疽病 チャノキイロアザミウマ チャノコカクモンハマキ チャノホソガ カンザワハダニ チャノミドリヒメヨコバイ クワシロカイガラムシ	やや少 並 並 並 やや少 やや多 並	並 並 並 並 やや少 やや多 並

【発生予報】 本文の（ ）内は平年値

早期水稲

1. いもち病（穂いもち）

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

ア 7月上旬の巡回調査（41筆）の結果、葉いもちの発病株率は0.3%（1.1%）、発生圃場率は41.5%（14.9%）であった。

イ 7月3半旬の県予察圃場（諫早市、無防除）調査の結果、発生を認めなかった（発生を認めない）。

(3) 防除上注意すべき事項

葉いもちの発生が認められる圃場では、穂ばらみ期と穂揃い期の2回防除を行う。

2. 紋枯病

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

ア 7月上旬の巡回調査(41筆)の結果、発病株率は0.2%(0.4%)、発生圃場率は9.8%(13.3%)であった。

イ 7月3半旬の県予察圃場(諫早市、無防除)調査の結果、発病株率は42.0%(20.9%)であった。

(3) 防除上注意すべき事項

粉剤及び液剤は株元に十分薬剤が付着するよう丁寧に散布する。

3. 穂吸汁性カメムシ類

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

ア 7月上旬のイネ科雑草におけるすくい取り調査(28地点)の結果、捕虫網による10回すくい取りあたり虫数は9.5頭(9.9頭)であった(表)。

表 イネ科雑草でのすくい取り調査における虫数の推移

種類別	10回すくい取りあたり虫数						発生地点率(%)	
	H18	H19	H20	H21	平年	H22	平年	H22
ホソハラカメムシ	0.4	0.4	0.4	0.3	0.5	0.3	61.0	46.4
クモヘリカメムシ	0.0	0.1	0.0	0.1	0.08	0.06	10.6	10.7
シラホシカメムシ	0.2	0.1	0.1	0.1	0.2	0.2	34.5	28.6
アカシジカスミカメ	10.4	9.0	10.8	4.6	9.0	7.9	73.6	64.3
ミナミアオカメムシ	0.01	0.05	0.02	0.03	0.02	0.01	2.7	3.6
計	11.1	9.6	11.3	5.2	9.9	9.5		

注) 数値は10回すくい取りあたりの虫数

すくい取り虫数及び発生地点率の平年はH13~21年の平均値

(3) 防除上注意すべき事項

ア 出穂期以降の水田周辺の雑草地を除草すると本田へのカメムシ類の飛来を助長するの
で行かない。

イ 本田への飛来が多くなる夕方に薬剤散布すると効果が高い。また、周辺雑草地
も含めて広域一斉防除を行うと防除効果が高まる。

ウ ミナミアオカメムシは斑点米を発生させる能力が高いので圃場での発生に注意する。
また一部の薬剤で感受性の低下が報告されているので、薬剤の選定にあたっては十分注
意する。

普通期水稻

1. いもち病(葉いもち)

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

ア 7月上旬の巡回調査(111筆)の結果、発病株率は0.0%(0.1%)、発生圃場
率は0.9%(3.9%)であった。

イ 7月3半旬の県予察圃場(諫早市、無防除)調査の結果、発生を認めなかった(発生
を認めない)。

ウ 7月以降、葉いもちの感染に好適な条件を満たした日が平戸市、対馬市厳原、西海市大瀬戸、壱岐市芦辺で認められた（葉いもち感染好適条件判定モデルによる。詳細はホームページを参照）。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 余り苗、補植苗は発病の伝染源となるので早めに処分する。
- イ 葉いもちの急性型病斑が見られた場合は早急に防除を行う。

2. 紋枯病

(1) 予報内容

発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

- ア 7月上旬の巡回調査（111筆）の結果、発生を認めなかった（発病株率0.0%、発生圃場率1.1%）。
- イ 7月3半旬の県予察圃場（諫早市、無防除）調査の結果、発生を認めなかった（発生を認めない）。

3. 縞葉枯病

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

- ア 7月上旬の巡回調査（111筆）の結果、発生を認めなかった（発病株率0.0%、発生圃場率2.3%）。
- イ 7月3半旬の県予察圃場（諫早市、無防除）調査の結果、発生を認めなかった（発生を認めない）。
- ウ 7月上旬の巡回調査（111筆）の結果、ヒメトビウンカの株当たり虫数は0.14頭（0.05頭）、発生圃場率は30.6%（14.0%）であった。
- エ 7月3半旬の県予察圃場（諫早市、無防除）調査の結果、ヒメトビウンカの寄生を認めなかった（寄生株率1.8%、株当たり虫数0.01頭）。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 発病株は伝染源となるので見つけ次第抜き取る。
- イ ヒメトビウンカの圃場での発生に注意する。

4. セジロウンカ

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

- ア これまでの飛来量は平年並で推移している。
- イ 7月上旬の巡回調査（111筆）の結果、セジロウンカの株当たり虫数は1.4頭（1.1頭）、発生圃場率は76.6%（62.1%）であった。
- ウ 7月3半旬の県予察圃場（無防除）調査の結果、株当たり虫数は6.8頭（1.9頭）、寄生株率は94.0%（57.1%）であった。

5. トビイロウンカ

平成22年7月15日付け、**病害虫発生予察防除情報第8号**による。

6. コブノメイガ

平成22年7月15日付け、**病害虫発生予察防除情報第8号**による。

大豆

1. ハスモンヨトウ

(1) 予報内容

発生程度 やや多

(2) 予報の根拠

ア フェロモントラップ(諫早市)の誘殺量は7月1半旬までは平年並に推移していたが、7月2半旬にやや増加した(図)。

イ 向こう1ヶ月の気温は平年並が高い見込みであり、本虫の発生に好適である。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 圃場の見回りを徹底し、白変葉が散見され始めたら早急に防除を行う。

イ 老齢幼虫になると薬剤の効果が低下するので若齢幼虫期に薬剤散布する。

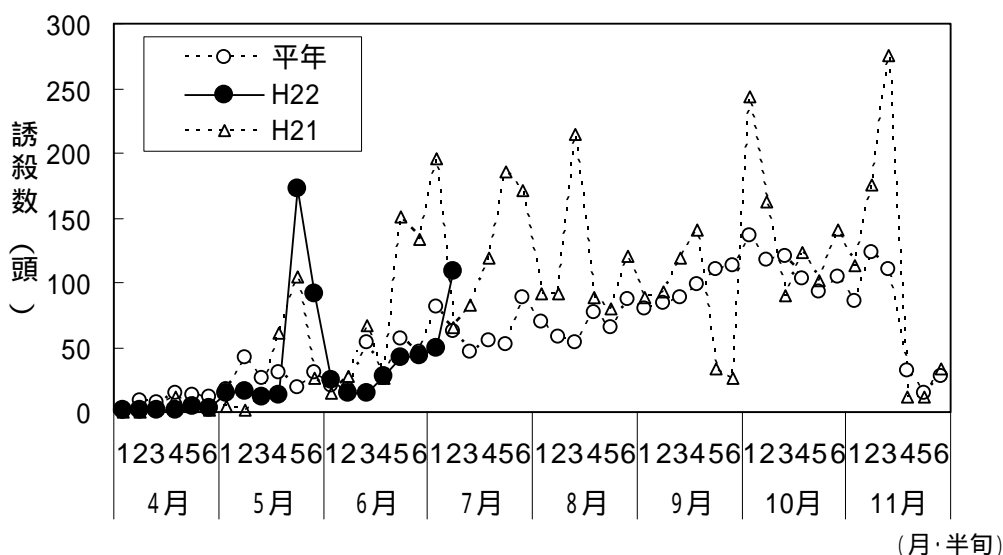


図 ハスモンヨトウのフェロモントラップにおける誘殺状況(諫早市小船越町)

いちご

1. うどんこ病

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

ア 7月上旬の巡回調査(33筆)の結果、発病株率は1.6%(4.1%)、発生圃場率は18.2%(43.6%)であった。

イ 病害虫防除員からの報告では、平年よりやや多い~多い発生である。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤散布は、薬液が葉裏、葉柄に十分かかるように散布する。

イ 除去した茎葉は、圃場内やその周辺に放置しない。

ウ 薬剤耐性菌発達防止のため、同一系統の薬剤は連用しない。

エ 炭疽病対策として、雨よけ育苗をおこなっている場合は、本病が発生しやすいので、注意する。

オ 夜冷・株冷処理を行なう場合は、入庫前の防除を徹底する。

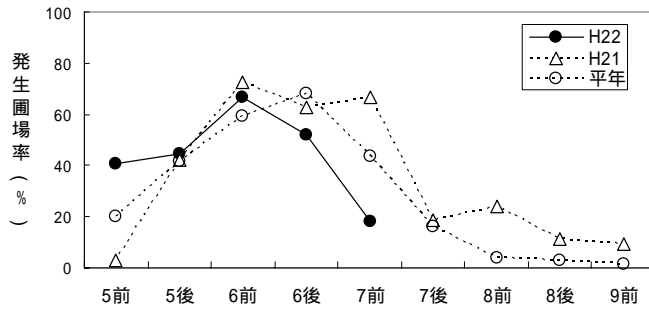


図 うどんこ病 発生圃場率の推移 (巡回調査)

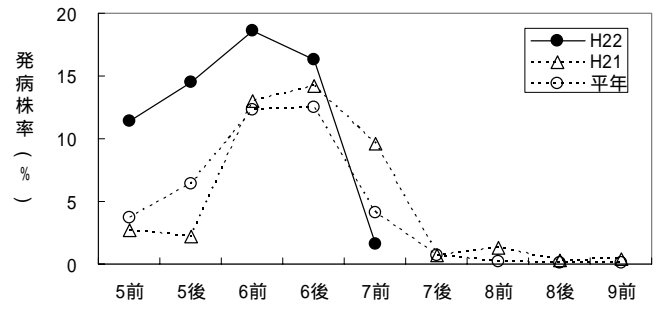


図 うどんこ病 発病株率の推移 (巡回調査)

2. 炭疽病 (*G.cingulata*)

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

7月上旬の巡回調査(33筆)の結果、発生を認めなかった(発生圃場率1.6%、発病株率0.0%)。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 育苗床が多湿にならないように、連続した長時間のかん水はしない。密植を避け、排水対策を確実に行う。
- イ 高設育苗や全面マルチを行い、降雨等による地面からの病原菌の跳ね上がりを防止する。
- ウ 発病した子苗およびその周辺の株は速やかに処分する。また、発病した親株から採苗した子苗は育苗せずに処分する。除去した発病株や茎葉は、圃場内やその周辺に放置しない。
- エ 葉の展開間隔にあわせて定期的に薬剤防除する。特に長雨、台風などの前後、下葉除去など株を傷つけるような作業後に重点的に行う。
- オ 夜冷・株冷処理を行なう場合は、入庫前の抜き取り及び薬剤防除を徹底する。

3. 輪斑病

(1) 予報内容

発生程度 多

(2) 予報の根拠

7月上旬の巡回調査(33筆)の結果、発病株率は10.9%(1.8%)、発生圃場率は66.7%(18.9%)であった。

(3) 防除上注意すべき事項

- ア 罹病葉は伝染源となるため栽培上支障のない範囲で除去する。また、除去した罹病葉は圃場周辺に放置しない。
- イ 肥料不足は発病を助長するので留意する。
- ウ 過湿条件は発病を助長するので、密植を避け、通風を良くする。

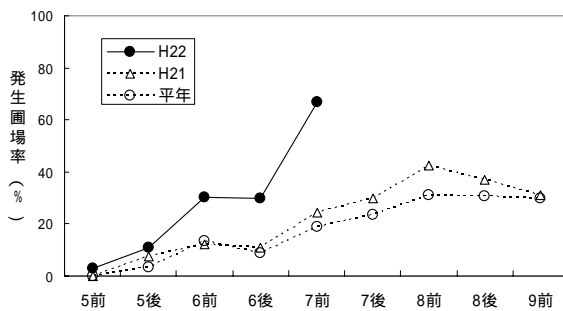


図 輪斑病 発生圃場率の推移

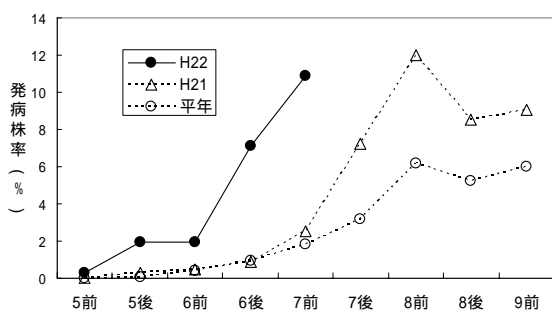


図 輪斑病 発病株率の推移

4. ハダニ類

(1) 予報内容

発生程度 やや多

(2) 予報の根拠

7月上旬の巡回調査(33筆)の結果、寄生株率は2.4%(1.0%)、発生圃場率は24.2%(8.7%)であった。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 薬剤散布は散布むらがないように、葉裏まで付着するよう十分量をていねいに散布する。

イ 薬剤感受性が低下しやすいので、同一薬剤は連用しない。

ウ 本圃での天敵放飼を予定している場合は、薬剤によっては長期間影響を与えるものがあるので、使用時期に注意する。

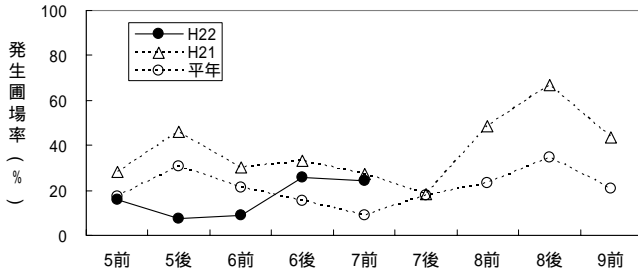


図 ハダニ類 発生圃場率の推移(巡回調査)

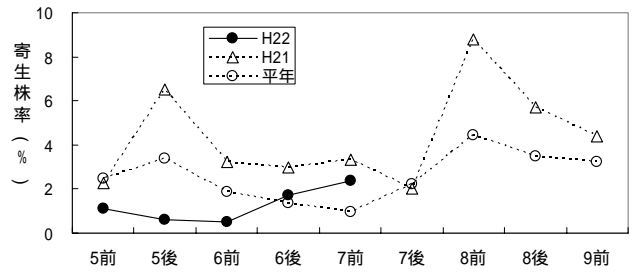


図 ハダニ類 寄生株率の推移(巡回調査)

アスパラガス

1. アザミウマ類

(1) 予報内容

発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

7月上旬の巡回調査(9筆)の結果、払い落とし虫数(10.5cm×22.5cmの白色板に5回×10ヶ所)は3.8頭(過去3カ年平均16.4頭)、発生圃場率は88.9%であった(過去3カ年平均77.8%)。

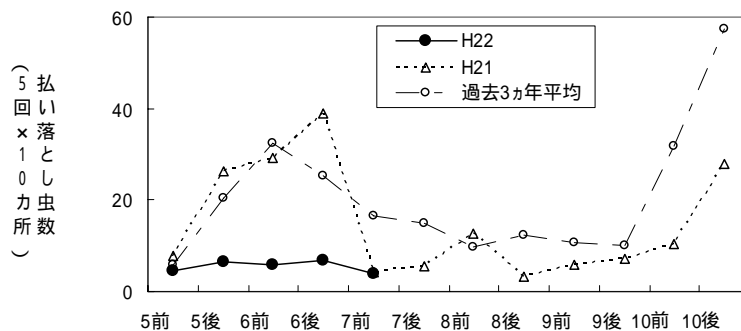


図 アザミウマ類 払い落とし虫数の推移(巡回調査)
払い落とし虫数は成虫、幼虫の合計

かんきつ

1. かいよう病

(1) 予報内容

発生程度 少

(2) 予報の根拠

7月上旬の巡回調査(39筆)の結果、発病葉率は0.0%(0.7%)、発生圃場率は2.6%(26.5%)であった。

2. 黒点病

(1) 予報内容

発生程度 やや多

(2) 予報の根拠

ア 7月上旬の巡回調査(39筆)の結果、発病果率は4.1%(1.0%)、発生圃場率は35.9%(13.8%)であった。

イ 向こう1か月の降水量は平年並または多い見込みであり、本病の発生に好適である。

(3) 防除上注意すべき事項

枯れ枝が重要な伝染源となるので、剪除する。

3. ミカンハダニ

(1) 予報内容

発生程度 やや多

(2) 予報の根拠

7月上旬の巡回調査(39筆)の結果、寄生葉率は16.0%(10.6%)、発生圃場率は59.0%(51.0%)であった。

4. チャノキイロアザミウマ

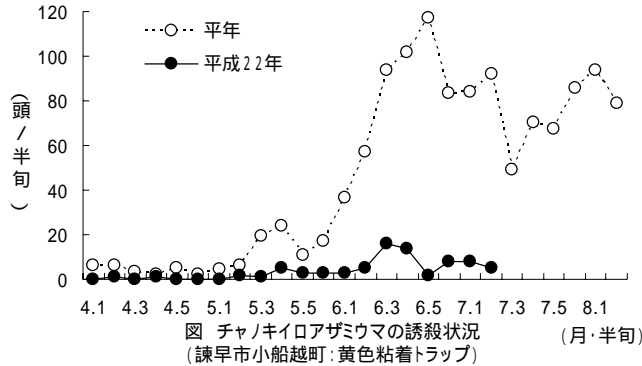
(1) 予報内容

発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

ア 7月上旬の巡回調査(39筆)の結果、果梗部の被害果率は0.2%(1.0%)、発生圃場率は2.6%(13.7%)であった。

イ 黄色粘着トラップ(諫早市)による誘殺量は、平年より少なく推移している(図)。



(3) 防除上注意すべき事項

ア 下表の予測発生ピーク日5日前から発生ピーク日に薬剤散布をすると防除効果が高い。

イ ただし、発生が多い圃場では1果当たりの寄生虫数が、0.1頭に達する前に防除を行う。

ウ 茶、かき、ぶどう、イヌマキなどから移動して加害することがあるので、それらでの発生にも注意する。

表 チャノキイロアザミウマ発生予測プログラムによる成虫の予測発生ピーク日

アメダス地点	長崎	佐世保	島原	松浦	大瀬戸	口之津
第4世代	7/18	7/20	7/20	7/27	7/29	7/17
第5世代	8/4	8/6	8/7	8/16	8/16	8/3
標高(m)	27	4	9	5	43	10

注1: 気温データは各地域のアメダスデータにより平成22年7月13日時点で予測し、7月14日以降は平年値(ただし島原及び松浦は平成21年測定値)を使用した。

注2: 同一地区内でも、標高や土地条件で予測発生ピーク日が異なる場合があるので注意する。

びわ

1. がんしゅ病

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

7月上旬の巡回調査(10筆)の結果、発病枝葉率は0.1%(1.3%)、発生圃場率は20.0%(40.0%)であった。

2. ナシヒメシンクイ

(1) 予報内容

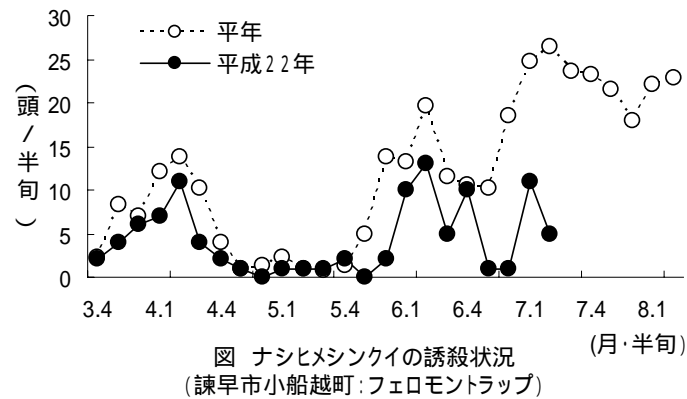
発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

ア 7月上旬の巡回調査(10筆)の結果、発生を認めなかった(寄生枝葉率0.0%、発生圃場率2.5%)。

イ 病害虫防除員の報告によると、発生量は平年並である。

ウ フェロモントラップ(諫早市)の誘殺量は、6月5半旬以降平年よりやや少なくて推移している(図)。



なし

1. ナシヒメシンクイ

(1) 予報内容

発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

フェロモントラップ(諫早市)の誘殺量は、6月5半旬以降平年よりやや少なくて推移している(びわの項 参照)。

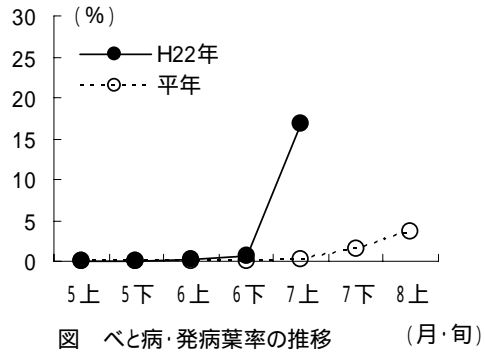
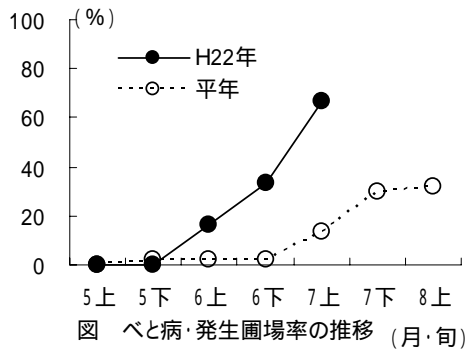
ぶどう

1. ベと病

平成22年6月30日付け、**病害虫発生予察注意報第5号**を継続。
なお、その後については、以下のとおりである。

(1) 発生状況

7月上旬の巡回調査(12筆)の結果、発病葉率は16.8%(0.3%)、発生圃場率は66.7%(13.5%)であった。



(2) 防除上注意すべき事項

ア 降雨が多い場合は発生が増加するので、天候を見ながら定期的に防除を徹底し、感染拡大を防ぐ。

イ 防除薬剤の選択にあたっては使用基準(特に使用時期)を遵守する。

果樹共通

1. カメムシ類

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

ア 各地区のフェロモントラップの誘殺量は平年並~やや少なく推移している(図)。

イ 7月上旬の巡回調査の結果、一部のなし圃場で被害を認めた。

ウ 7月上旬に実施したビーティング調査の結果、ヒノキきゅう果の着生量は平年並~やや少なく、69%の地点でカメムシの寄生を認めた。

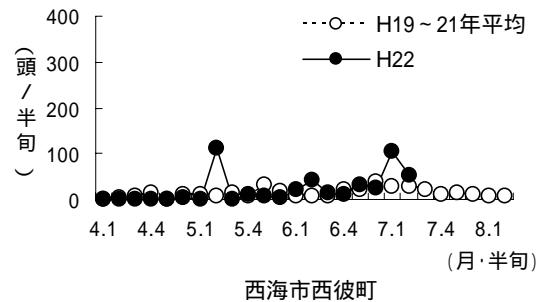
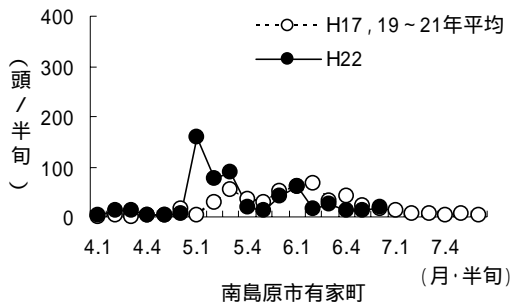
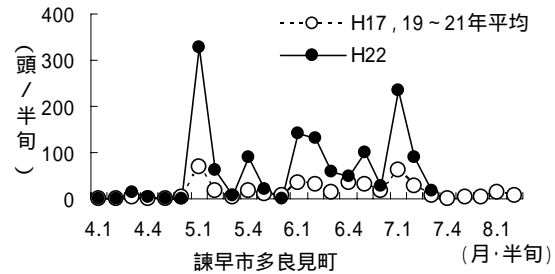
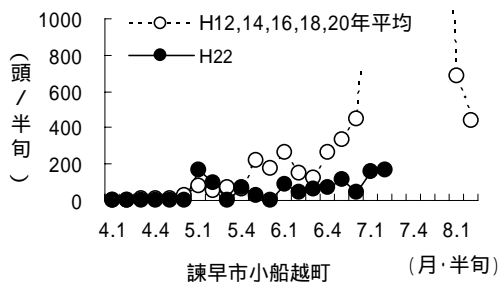


図 チャバネアオカメムシ・ツヤアオカメムシの誘殺状況(黄色コガネコール)

茶

1. 炭疽病

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

ア 7月上旬の巡回調査(20筆)の結果、1㎡あたり発病葉数は2.6枚(5.3枚)、発生圃場率は65.0%(53.0%)であった。

イ 向こう1か月の降水量は平年並みか多い見込みであり、本病の発生に好適である。

2. チャノキイロアザミウマ

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

7月上旬の巡回調査(20筆)の結果、たたき落とし虫数(A4版トレイ)は16.0頭(11.1頭)、発生圃場率は90.0%(77.5%)であった。

3. チャノコカクモンハマキ

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

ア 7月上旬の巡回調査(20筆)の結果、1㎡あたり巻葉数は0.1枚(0.2枚)、発生圃場率は20.0%(11.1%)であった。

イ フェロモントラップによる誘殺量(農林技術開発センター茶業研究室調査)は平年並で推移している(図)。

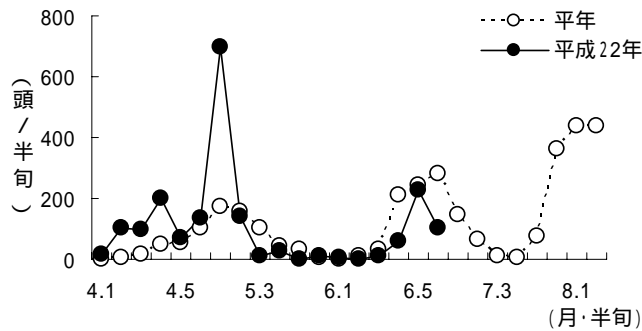


図 チャノコカクモンハマキの誘殺状況(東彼杵：フェロモントラップ)

4. チャノホソガ

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

ア 7月上旬の巡回調査(20筆)の結果、発生を認めなかった(1㎡あたり巻葉数0.1枚、発生圃場率5.8%)。

イ フェロモントラップによる誘殺量(農林技術開発センター茶業研究室調査)は平年並で推移している(図)。

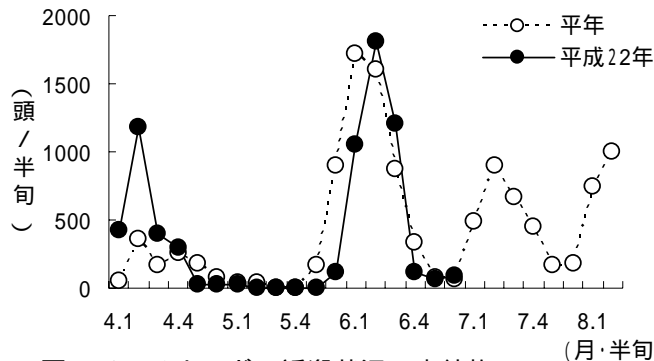


図 チャノホソガの誘殺状況(東彼杵：フェロモントラップ)

5. カンザワハダニ

(1) 予報内容

発生程度 やや少

(2) 予報の根拠

7月上旬の巡回調査(20筆)の結果、発生を認めなかった(寄生葉率0.3%、発生圃場率9.5%)

6. チャノミドリヒメヨコバイ

(1) 予報内容

発生程度 やや多

(2) 予報の根拠

7月上旬の巡回調査(20筆)の結果、たたき落とし虫数(A4版トレイ)は3.1頭(1.6頭)、発生圃場率は85.0%(44.7%)であった。

(3) 防除上注意すべき事項

葉裏にすることが多いので、葉裏にも十分薬液がかかるよう散布する。

7. クワシロカイガラムシ

(1) 予報内容

発生程度 並

(2) 予報の根拠

6月上旬の巡回調査(20筆)の結果、寄生株率は5.6%(4.0%)、発生圃場率は40.0%(29.5%)であった。

(3) 防除上注意すべき事項

ア 1回脱皮してロウ質のカイガラを作りはじめると薬剤の効果が低下するので、下表のふ化盛期予測日を中心に防除する。なお、独自にふ化盛期日を現地調査し防除適期を判断している地域ではその判断を優先する。

イ 株内の枝や株元に薬液がかかるように十分量散布する。

表 「有効積算温度則による防除適期予測法」によるクワシロカイガラムシのふ化盛期予測日(第2世代)

地点名	標高	平成22年	平成21年	平成20年	平成19年
東彼杵町太の原	360m	7/27	7/25	7/25	7/26
五島市上大津	77m	7/16	7/13	7/16	7/11

注1：方法は「有効積算温度則による防除適期予測法(農林技術開発センター茶業研究室)」により、東彼杵町：7月1日、五島市：7月14日時点で予測した。

注2：使用する気温データは、農林技術開発センター茶業研究室(東彼杵町)の測定値及びアメダスデータ(五島市)を使用し、予測日以降の気温データは平成21年測定値を使用した。

なお、第1世代のふ化盛期を、東彼杵町太の原：5月22日、五島市上大津：5月11日とした。

注3：同一地区内でも標高や土地条件でふ化盛期日が異なるので注意する。

【参考】
気象

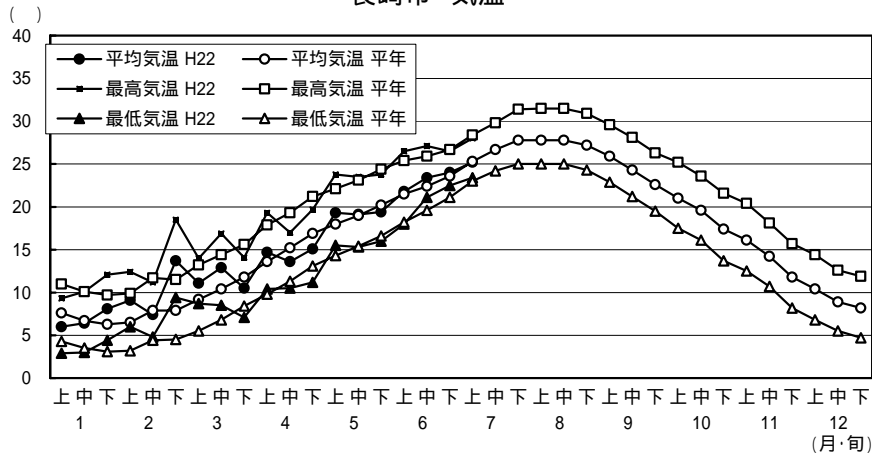
(平成22年7月9日発表 1か月予報 福岡管区气象台)
要素別確率

要素	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	20	40	40
降水量	20	40	40
日照時間	40	30	30

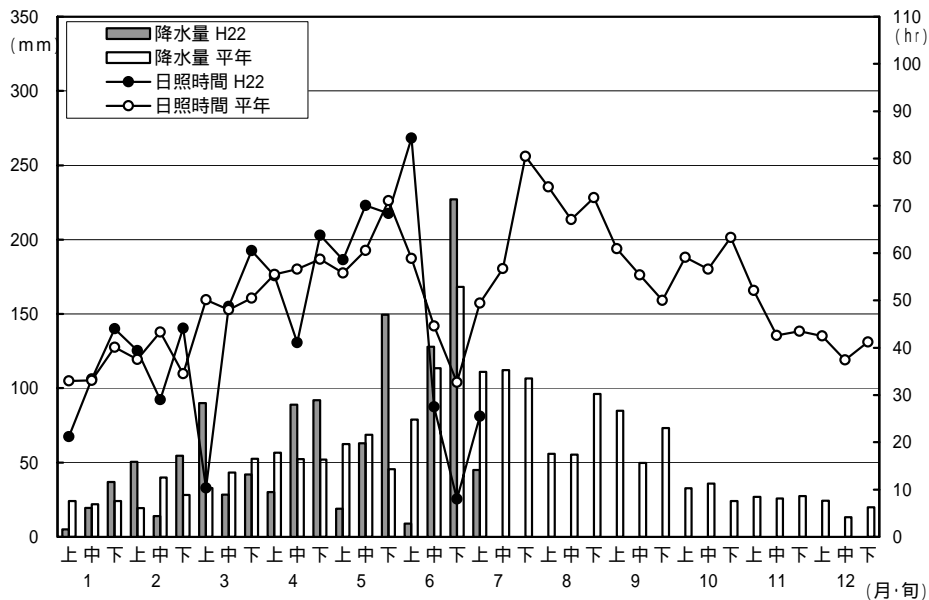
予報対象地域：九州北部地域

平成22年の気象経過（長崎海洋气象台）

長崎市 気温



長崎市 降水量と日照時間



6月15日から8月14日までの2ヶ月間を「農業危害防止月間」と定め、農業事故を防止する運動を実施しています。

病害虫防除所の発行する情報の入手は、インターネットをご利用ください。

「防除所ホームページ」 アドレス：<http://www.jppn.ne.jp/nagasaki/>

この情報に関するお問い合わせ

長崎県病害虫防除所 TEL：0957-26-0027